

事情が許さぬから詮方がない。休むてゐる間にも、手本を借りて来て暇々に勉強した、そして同輩より遅れまいと勉めた。晝間は墨繪も油繪も、模寫か想像で畫くのであるが、夜の長い時分は夜學もあつた。その時は石膏像の寫生をした。晝と夜と二度分の辨當を持つて通ふ者もある、主人は一度家へ歸つてまた出直した、その頃主人は本郷眞砂町に住むてゐた。

八

二十五年の二月に、主人は清水某といふ青年に知り合になつた。此青年は曾山改め大野塾の生徒であつたが、この一月に先生が死むたので、不同舎に通ふことになつて、主人の家の座敷を借りに來た。主人は此人から種々な新しい話をきいた、寫生を充分やらなければ上達せぬこと、戶外寫生の必要であること、大野塾では毎月研究會のあること、また廻覽雜誌も出してゐること等であつた。稽古の單調に倦むてゐた主人の心は大に動いた、續いて其人の手に成つたといふ寫生畫を見るに及んでは、一日も現狀に満足が出來なくなつた。

手初めに戶外寫生をやらうといふので、塾へ往つて同志を募つた。先輩顔してゐる連中は相手にならない、あまり新參も話合はない、相談に應じたのはKM君、HM君、JM君、KH君、で、主人と合せて五人の組合が出來た。

僕は、此時初めて京橋の伊藤といふ繪具屋から、主人の手に渡つたのだ。その時分繪具屋といへば、伊藤一軒と云ふてよい、文房堂は中西屋の隣りの、一間半間口の小さな店を出してゐた

が、木炭や紙はあつた、水彩繪具も箱入が二三種はあつたが、油繪具は無い、三脚なども賣つてゐない、インキやペンを賣る普通の文房店に過ぎなかつたのだ。

伊藤にはカツパブロンとの別名を持つてゐる番頭が居て、よく塾なり私宅へなり御用聞きに來たものだ。時々は拔賣もやる、よくない男であつたが、随分燒芋の御使ひ位ひはして皆んなから重寶がられた。

△ △ △
圖畫と云ふものゝ練習のない眼では丸い盆を斜に見てもヤハリ眞丸く見えるやうに思つて居る。白百合の花は明るい縁端でも暗い座敷の中でも同じやうに白いものと心得て居る人が多いやうである。色彩の方のことは形ちを見るよりも一層の熟練を要すること。同じ色でも場合に依つては全く違ふ色に見えるものである。通常素人が物を見るには其外形と持前の色とを見るのである。持前の色と云ふのは其物を側で見た時の色で著しい光も影も著いて居らぬものを毎も其物の色と決めて居ることである。(欽)